

The Women's Studies Association of Japan

発行 日本女性学会
事務局 〒020-0124
岩手県盛岡市厨川4丁目13番8号
E-mail jyoseigakkai-info@genj.jp
ウェブサイト
<https://joseigakkai-jp.org/>
頒価 一部300円

学会ニュース

日本女性学会
第163号 2025年5月

目次

2025年度日本女性学会大会プログラム…	1	会員の著書紹介募集のお知らせ……………	13
2025年度日本女性学会大会……………	3	会費納入のお願い……………	13
シンポジウム……………	3	大会会場アクセス……………	14
総会案内……………	5		
分科会（個人研究発表・パネル報告・ ワークショップ）……………	6		

2025年度日本女性学会大会 「科学技術は女性を解放するか？」

日程：6月7日（土）、8日（日）

会場：立教大学池袋キャンパス
東京都豊島区西池袋3-34-1

参加費：会員500円／非会員1,000円

プログラム

※7日（土）と8日（日）では建物が異なりますのでご注意ください。

※総会は、8日（日）になります。

第1日 6月7日（土）

- 13:00～ 受付開始（11号館3階 エレベーター付近）
- 14:00～17:30 シンポジウム（11号館3階 A304教室）
- 18:00～19:00 懇親会（12号館3階 B343 社会調査研究室）

第2日 6月8日（日）

- 9:00～ 受付開始（14号館5階 エレベーター付近）
- 9:30～12:00 分科会【個人研究発表、ワークショップ】14号館4～6階
- 12:00～13:00 昼食
- 13:00～15:30 分科会【個人研究発表、パネル報告】14号館4～6階
- 16:00～17:00 総会（14号館4階 D401教室）

大会事務局からのお知らせ

*保育支援

小さなお子さんをもつ会員の大会参加を支援するため、大会参加のために一時保育を利用された場合に、会員一人当たり5,000円の補助を行います。希望される方は、以下の方法で手続きください。

*5月30日(金)までに、事務局までメール件名を【大会保育補助希望】として、必要事項(会員氏名/所属/住所/電話番号/預けるお子さんの年齢・人数/保育サービスを利用する日にちと時間/利用する保育サービス業者の名称・場所(HPがあればそれも))を記載のうえ、メールで申し込んでください。予算上、10件程度以内を予定していますので、利用される方はなるべく早くお申し込みください。

*利用日(学会大会当日に限る)の日付と宛先(当該会員氏名、子どもさんの年齢と人数)が記載された領収書(または請求書・明細書など利用を証明できるもの)を大会受付に提示し、5,000円の支払いを受けてください。(1)の申し込みがされていても、領収書(ないしは請求書明細書)の提示がない場合には、お支払いできません。

*学会からの支払いができるのは、民間・行政等の別や、地元か東京かは問いませんが、有料の業者を利用した場合に限ります。友人や親族による預かりには適用できませんので、ご了解ください。

*大会の両日とも利用された場合も、1件5,000円に限ります。

*非会員には適用されませんが、申込時までに入会手続きを済ませた場合は、利用可能です。

*バリアフリー対応

バリアフリー対応として、たとえば、要約筆記、拡大コピーなどのご要望があれば、事務局まで5月30日(金)までに、メール件名を【バリアフリー対応希望】として、お知らせください。

*書籍販売

書籍販売をご希望の出版社、書店等の方は、事務局まで5月30日(金)までに、メール件名を【書籍販売の申し込み】として、お申し込みください。

*懇親会(事前申込み不要)

シンポジウム終了後、懇親会を開催します。会費は2,000円です。アルコールの提供はありませんが、美味しい軽食をご用意します。懇親会で親睦を深めた後、二次会や夕食会へ繰り出すことも可能な時間帯となっています。ぜひ参加をご検討ください。

*昼食について

構内の食堂は、土曜日は一部しか営業しておらず、日曜日は閉まっています。大学正門の前にコンビニエンスストアがあります。大学や池袋駅の周辺には多くの飲食店があります。

*「学会活動の自由と公正のための宣言」

大会参加にあたっては、同宣言を遵守するようお願い申し上げます。

日本女性学会 2025 年度大会シンポジウム

6月7日(土) 14:00～17:30

(11号館3階 A304教室)

「科学技術は女性を解放するか？」

シンポジスト：柘植あづみ(明治学院大学)・標葉靖子(実践女子大学)・横山広美(東京大学)

司会／コーディネーター：宮津多美子・千田有紀(日本女性学会幹事)

趣旨説明

女性学やフェミニズムにおいて、科学技術は中心的なテーマであった。とくに第二波フェミニズムにおいて、シュラミス・ファイアストーンは女性の解放の鍵として、「再生産」の管理を女性の手に取り戻すことを提唱した。彼女の提案した解決策は「人工子宮」であった。当時は夢物語であると一笑されたが、その後の科学技術の進展により、ハリウッドセレブのような一部の人には出産から「解放」される一方で、他人のために自らの身体を差し出す女性たち、また自らのために自分の身体を医療の対象とする女性たちをうんでいる。こうした科学技術は女性にとって福音となり得るのか。フェミニズムは、科学技術をどう考えるべきなのか。

従来、女性の身体は科学技術の対象とはされてきたが、担い手としては考えられてこなかった。しかし近年、OECD 諸国のなかでもとりわけ低い女性の比率を受けて、理工系学部の大学入試での女子枠設置など「リケ

ジョ」は「国策」となってきた。なぜ日本の女子学生は理系を志さないのだろうか。

本シンポジウムでは、柘植あづみ氏に生殖医療技術の高度な進展を踏まえて、こうした技術が女性たちに何をもたらしたのか、そして何をもたらさなかったのかについて、標葉靖子氏には、女性の心身の健康に関するテクノロジーやサービスである「フェムテック」を「ケア格差」や「ジェンダード・イノベーション」などに絡めてその期待と課題について、横山広美氏には、ジェンダー平等が達成され GDP が高い豊かな国ほど、数学ステレオタイプが強く、理系女性は少ないという「STEM ジェンダーパラドクス」等を踏まえて、なぜ女子学生は、理系を志さないのか、日本社会では理系女子に対して、今後どのような戦略をとればいいのかについて、幅広く考察していただく予定である。

「生殖技術は『女性』に何をもたらしたか／何をもたらさなかったか」

柘植あづみ(明治学院大学)

フェミニストによる生殖技術に関する初の書籍は *TEST-TUBE WOMEN: What Future for Motherhood?* (R. Arditt, R.D. Klein, and S. Minden eds., London, Pandora Press, 1984) であろう。450 ページを超える原著では、体外受精や卵子、胚の実験、遺伝子操作、クローニング、代理出産産業、中絶、出生前検査と選別中絶、強制的な不妊手術、第三世界の人口抑制政策による新しい避妊技術の強要、子どもの性別選択、障害のある女性と生殖技術、レズビアンのための提供精子による人工授精などのテーマがフェミニズムの視点で論じられた [一部はリタ・アルディッティ他編、ヤンソン由実子訳『試験管の中の女』1986、共同通信社]。

そこで提示された多様な問題は 40 年が過ぎて、日本だけで 10 人に一人が体外受精等の生殖補助技術で生まれる時代に、あるものは女性の生殖の権利を達成するためという洗練された理由付けをされ、あるものは、選択肢の拡大という夢としてふりまかれている。ES 細胞や

iPS 細胞などの技術を用いて体細胞から生殖細胞の作製が可能になるなど想定を超えて発展しつつある。もう一つは、遺伝学的検査の精密化、低コスト化によって、生殖に遺伝学的検査が深く浸透したことが、子どもをもつことの意識を変化させた。さらには、子宮移植技術の導入、自己の卵子の凍結保存の汎用化は「女性」が妊孕性を有することの価値を高めてみせた。

これらは、医療技術拡大の論理と「患者」の選択／自己決定の論理が併存する新自由主義社会が実現したわけだが、その基盤では家族、ケアの担い手、自己実現としての「母性」、能力主義、宗教への生物学の取り入れ、「あきらめる」ことをできなくする科学・医学技術の発展、医療の高額化と経済格差、選択と自己責任などの要素が絡み合い、問題を複雑化している。そこで、生殖技術の「進歩」がどんな社会を導くのかについて考察し、その問題を解決するためになすべきことについても話し合いたい。

「フェムテックを超えて考える—ジェンダード・イノベーションへの期待と課題」

標葉靖子（実践女子大学）

近年、「フェムテック（FemTech）」と呼ばれる、女性の心身の健康問題にテクノロジーやサービスが急速に拡大している。月経・妊娠・更年期といったこれまで十分には対応されてこなかった領域に焦点を当て、科学技術の力によって課題を解決しようとするこれらの動きは、女性の生きづらさを軽減し、多様なライフコースを支援する可能性を持つものとして歓迎されている。しかしながら、こうした動向が本当に女性を「解放」するのかという点については、慎重な検討が求められる。たとえば、フェムテックによる身体のデータ化・管理化を通じて新たな規範やプレッシャーを生み出すリスクや、課題解決の責任が個人に帰されてしまうリスクが考えられるだろう。さらに、フェムテックが主に中間層以上の購買力を前提として展開されている現状は、ケア格差や情報格差を拡大する可能性も孕んでいる。

本講演では、フェムテックの事例を出発点に、より包

括的な研究・技術開発のあり方を模索する視座を提示したいと考える。特に注目するのは、「ジェンダード・イノベーション（GI：Gendered Innovations）」の可能性と課題である。GIは、医療、工学、都市計画、AIなど多様な科学技術領域において、従来見過ごされがちであったジェンダー視点を意図的に組み込み、単に女性を「対象」とするのではなく、知識生産や技術開発そのものを変革していこうとする試みである。一方で、GIもまた商業主導型のイノベーションに取り込まれるリスク、固定的なジェンダー役割を再生産してしまう懸念、さらにジェンダー以外の交差性（人種、階級、障害など）への十分な配慮が不足する危険性など、批判的検討を要する対象でもある。当日は、誰のための科学技術か、どのような身体や社会のあり方を前提としているのかといった基本的な問題設定に立ち返りながら、議論を展開したい。

「女子生徒の進路選択と理系—現在の問題は何か」

横山広美（東京大学）

日本はOECD諸国の中で、理工系（STEM：Science Technology Engineering Mathematics）に占める女性学生の割合が最下位である。この20年間、さまざまに努力が重ねられてきたにも関わらず、日本では数字上はほとんど変化がない。理工系には男性イメージが強く、特に就職が男性向きである、数学は男性の方ができるというステレオタイプが強いことがわかっている。PISAなどの世界共通のテストでも、日本の女性のスコアは非常に良いにも関わらずである。成績は良いのになぜ、日本の女性は理工系に進学をしないのか。日本のジェンダーの不平等がさまざまに影響していることがデータから見て取れる。

なぜ理工系に女性が少ないと問題なのか。ひとつは、もともと理工系を希望している女子生徒が、周囲の大人に反対をされて希望の進路をとれないという問題がある。地域や家庭によっては、進学自体を許されない女性がまだ多いことも課題である。二つ目は、急速な少子化

の中で留学生と同様、人材として獲得したいという政策がある。三つ目は、理工系の卒業生が少ないことから、企業におけるエンジニアをはじめ、社会の中で理工系女性が少ない。これは様々にバイアスを生み出すと懸念されている。

世界では、多くの努力で理工系の女性率が上昇している国もある。一方で研究者間では、直観と反する「STEMジェンダーパラドクス」が知られている。これは、ジェンダー平等が達成されている国ほど、そしてGDPが高い豊かな国ほど、数学ステレオタイプが強く、理系女性は少ないという現象である。女子生徒は、数学、理科よりも読解力の方が高い傾向がある。ジェンダー平等になるほど、数学、理科の点数は男子と同じになり、読解力は女子の方がさらに高くなることが知られている。鍵は、現状で非常に低い、理工系進学に対する女子生徒の関心を高くすることだ。日本ならではの戦略を検討する必要があり、議論を通じて検討をしていきたい。

パネリスト（発表順）

柘植あづみ

明治学院大学社会学部社会学科教授、博士（学術）。専門分野は医療人類学、生命倫理学。広義の生殖技術を対象として、医師—患者関係に見る医療技術とジェンダー、不妊治療「患者」のライフストーリーと技術の選択要因、出生前検査の受検と女性のライフストーリー、内診台の開発・応用とジェンダーなどのテーマでインタビュー調査を中心にした調査研究を行ってきた。主な著書として『生殖技術と親になること—不妊治療と出生前検査がもたらす葛藤』みすず書房（日本医学ジャーナリスト協会賞 2022 年大賞受賞）、2023 年科学技術社会論・柿内賞特別賞受賞。

標葉靖子

実践女子大学人間社会学部社会デザイン学科教授。専門は科学技術社会論・科学コミュニケーション論。博士（生命科学）。帝人株式会社新事業開発グループ、東京工業大学環境・社会理工学院イノベーション科学系助教等を経て現職。現在は科学技術イノベーションプロセスにおける「共創」について研究・実践を行っており、近年はその一環としてフェムテック等に注目している。主な著作に、『残された酸素ボンベ：主体的・対話的で深い学びのための科学と社会をつなぐ推理ゲームの使い方』（ナカニシヤ出版 2020 年）など。

横山広美

東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構・学際情報学府教授。専門は科学技術社会論。高エネルギー素粒子実験で東京理科大学大学院博士課程退学、博士（理学）の後に、人文社会科学に転向、総合研究大学院上級研究委員、東京大学大学院理学系研究科准教授を経て現職。社会は科学技術をどのように見ているのかを、国際比較の社会調査データを分析しながら研究教育活動を行う。理系女性研究の他、科学の信頼問題、AI や気候変動の倫理について国際共同研究をしている。

懇親会

6月7日（土）18：00～19：00
（12号館3階 B343 社会調査研究室）

総会

6月8日（日）16：00～17：00
（14号館4階 D401 教室）

*議案は当日配布します。会員のみならず、ふるってご出席ください。

分科会

(個人研究発表・パネル報告・ワークショップ)

6月8日(日) 9:30~12:00

【分科会1 個人研究発表】

(14号館5階 D502教室)

司会：北仲千里

中絶をめぐる関係性の倫理——カナダモデルとケアの政治学の交差点

塚原久美

本研究は中絶をめぐる倫理的議論を「関係性」の観点から再考し、カナダの無規制モデルとケアの政治学の交差点を探るものである。従来の中絶議論は「胎児の権利」と「女性の自己決定権」の対立図式に依拠してきたが、本発表では妊娠を関係性として捉え、中絶の道徳性を文脈依存的に理解するアプローチを提案する。カナダでは1988年以降、中絶を制限する法律が存在しないにもかかわらず、医療倫理の枠組みで適切に管理されている。この事例から、「規制しない」というアプローチが、むしろ関係性に基づく倫理的判断を可能にする側面を考察する。さらに、ケアの政治学が提起する依存と自律の弁証法的理解が、中絶政策に新たな視座をもたらす可能性を検討する。終わりに、規制の撤廃と社会的支援の両立を通じた「規制しないことによる規律」という倫理的枠組みの可能性を提示する。

「嬰兒殺」とは何か——判例とマスコミ報道を事例として

狩谷あゆみ

『犯罪白書』や女性犯罪に関する文献において、万引き(窃盗の内数)と嬰兒殺(殺人の内数)は、女性犯罪の特徴と考えられてきた。「嬰兒殺」とは「警察統計、司法統計とも生後1年未満児の殺害をもって嬰兒殺として扱う」のが一般的と言われ、1970年代には「コインロッカーへの嬰兒遺棄事件」として話題となった。数としては減少しているものの、近年、外国人技能実習生や「望まない妊娠」により困窮した女性による遺棄・殺人事件として再び話題となっている(なお、近年では「嬰兒」ではなく、「新生児」「生まれて間もない赤ちゃん」と報道されている)。本報告では、LEX/DBインターネットなどのデータベースを利用し、「嬰兒殺」に関する判例と新聞記事等のマスコミ報道を事例として、「嬰兒殺」がどのような問題として捉えられてきたのかを明らかにしていく。

映画『白蛇2：青蛇劫起』を巡る論争を読み解く—現代中国におけるジェンダー意識の変容—

陳 媛媛

中国アニメーション映画『白蛇2：青蛇劫起』(2021年公開)は、中国民間四大伝説である『白蛇伝』に基づく『白蛇：縁起』の続編として製作・公開された。興行収入5億人民元を突破したほか、中国アニメの技術的進化、文化的創造力の向上を象徴する作品として高い評価を受けた。原典は、白蛇が人間の女に変化し、人間の男との禁断の愛を描く物語である。『白蛇2』では、前作で脇役だった青蛇が主人公となり、高僧の法海によって弱肉強食の異空間の修羅域に封ぜられながらも白蛇救出を目指す彼女の成長が描かれている。これまでの研究では、青蛇を救う存在が男性であることに焦点が当てられてきたが、本発表では、修羅域での経験に着目し、青蛇が自己の意志や他者との協働を通じて主体性を確立していく過程を分析し、現代社会における男女平等を考える上で、自己犠牲ではない主体的な利他的行動が必要であることを論じる。

「愛されるモンスター」としての女性芸人 —山田邦子にみる非規範的女性像の形成とその限界

施 欣淳

本研究は、1980~90年代に活躍した女性芸人・山田邦子を事例に、女性芸人がメディア環境との交渉の中で形成する、規範とは相応しくない女性像のあり方を考察するものである。分析対象は、バラエティ番組『オレたちひょうきん族』と『邦ちゃんのやまだかつてないテレビ』の出演シーンと、1981~1996年の女性週刊誌記事である。これらのメディアコンテンツの内容分析を通じ、山田邦子の表象がいかに関構築され、また失速していったのかを検討する。山田は奇抜な行動を持つ働く女性や「ブサイク」なキャラクターを演じ、従来の規範から逸脱する女性像を提示している。一方、冠番組では大物MCとしての資質を示し、親しみやすさや可愛らしさを打ち出すことで人気を博した。そのメディア上の立ち位置は、性的魅力の対象ではなく、排除の対象としてのモンスター・フェミニンとも異なり、“笑い”を媒介に「愛されるモンスター」として捉えることができるだろう。

【分科会 2 個人研究発表】

(14号館 6階 D601 教室)

司会：細谷実

不登校の子どものいる母親のエンパワメントの様相～母親規範に伴う生きづらさを着眼点として～

小倉明子

本発表は不登校の子どものいる母親が、母親規範に伴う抑圧を受け、葛藤を抱えやすいという状況に着目し、母親たちのエンパワメントのあり様をソーシャルワークの観点から明らかにしようと試みるものである。学術情報検索サイト CiNii によると 2,000 年以降に「不登校」という項目をタイトルに含む論文は 7,560 件該当するにも関わらず、「不登校」「母親支援」という二項目をタイトルに含む論文は該当がない（最終アクセス 2025 年 4 月 4 日）。しかし実際の不登校支援は学校と家庭の狭間で風当たりを受け、孤立しがちな母親への対応に多くの時間が充てられており、その支援の在り方の研究は喫緊の課題である。そこで母親規範に伴う生きづらさの存在を視野に、彼女たちがいかにしてエンパワメントに向かうのかをインタビューで明らかにした。支援の在り方に拠って異なる傾向と、そこに通底するジェンダーセンシビリティ、エネルギー溢れる連帯の様相を報告する。

ジェンダー・セクシュアリティの視点から、教育とこどものウェルビーイングを捉え直す

中村奈津子

「ウェルビーイング」は、個人の在りように着目し、人権尊重の視点から組織や社会の持続可能性をめざす、より良い未来へ向けたキーワードの一つである。「ポスト SDGs 時代の重要なキーワード」とも言われ、政府や自治体・企業・学校・NPO / NGO など、多様なセクターによって、その実現へ向けた議論や取り組みが進められている。2025 年 4 月 17 日、学事出版から『教育とジェンダー「ふつう」って何?』が出版され、報告者はその第 1 章で、「こども政策」に登場したウェルビーイングとジェンダー・セクシュアリティとの関りや、教育に携わる大人の役割について言及した。本報告では、本書の内容をもとに、ジェンダー・セクシュアリティの視点を欠いた、教育とこどものウェルビーイングの議論と取り組みの限界を指摘する。

コロナ禍による日本人若年女性の性別役割分担意識の変化——仙台市在住の飲食業 20 代社会人女性へのインタビュー調査から

張 思源

2020 年から世界規模で拡大したコロナ禍は社会の各方面に深刻な影響を及ぼした。本研究では、コロナ禍を経験した日本人若年女性の性別役割分担意識の実態はどのようなものか、コロナ禍でその性別役割分担意識には変化が起こったのか、もし変化が起こった場合はどのような変化が起こったのかを検討することを目的とする。調査対象と調査方法については、仙台市在住の飲食業に従事している 20 代未婚の社会人女性 20 人に対し、半構造化インタビュー調査をおこなった。分析の結果、コロナ禍による不況、雇用環境の悪化、収入の不安定化に影響され、調査対象者の就労意欲が強まり、結婚・出産を機に退職するまたは雇用形態を変更する意向が低下する傾向がみられた。総じて、性別役割分担意識はより平等な方向へと移行する傾向があったが、一方で、伝統的な性別役割分担の影響が依然として根強く残っていることも明らかとなった。

美容実践を論じるための理論的視座：新自由主義、インターセクショナルリティ、感情社会学

永山理穂

本報告は、美容実践を「自己表現としての自由な選択」か、「社会的圧力による強制」かという二項対立を超えて検討することを目指す。具体的には、まず新自由主義の視点から、美容行為が自己責任論や市場競争のもとで義務的な行為に変質していることを示す。次にインターセクショナルリティの視点を用いて、人種や階級といった社会的要因によって美容へのアクセスや評価基準が異なり、それが格差を再生産している状況を指摘する。さらに感情社会学の観点から、美容実践を通じて生じる自信や羞恥といった感情が、個人の内面ではなく社会的な規範や他者の評価によって形成されていることを明らかにする。このように多面的な視座を統合することで、美容実践が抱える社会的・感情的な複雑性を包括的に理解するための新たな分析枠組みを提示する。

【分科会 3 個人研究発表】

(14号館 6階 D602 教室)

司会：三枝麻由美

博士課程修了後の進路選択理由の性差：アカデミアを選択しなかった16名の語りから

中野円佳

本発表では、博士課程修了後にアカデミア以外の仕事を選んだ男女の語りについて、どのような性差があるかを定性的に明らかにする。本研究では、東京大学大学院教育学研究科の本田由紀教授が2022年度に実施した「東大卒業生のキャリアに関する調査」において、インタビュー調査への協力について可能と回答した東京大学博士課程修了者に対し依頼し、その後対象者を増やした。本発表ではアカデミア以外の道を選んだ男性6名、女性10名へのインタビューを対象とし、アカデミアに残らなかった理由についての語りを分析する。「自分には研究が向いていないと感じた」など共通の理由であっても、なぜそのように感じたのかについては、研究室運営や業績をあげることの難しさが男女ともに挙げられる一方、女性は子育ての両立などに言及していることが多く、日本のアカデミアにおける女性の「パイプの水漏れ」現象につながっていることを指摘する。

大学が行う女性研究者支援の取組——「専門部署」が提供する支援の比較

樋熊亜衣

近年ダイバーシティ推進室や男女共同参画室などを設置し、女性研究者支援の取組を実施する大学は珍しくない。例えばライフイベント中の研究者に対する研究費助成や、女性研究者の学内ネットワーク形成など、各大学がそれぞれに女性研究者支援の取組を行っている。そうした個々の大学の取組についての報告なども多数発表されている。しかし一方で大学全体の傾向、例えば国公立別や大学の規模、地域などによる特徴などは十分に検討がなされているとは言い難い。そこで本発表では日本の国公立大学719校を対象に、大学が女性研究者支援の枠組みでどのような取組を行っているかを探索的に調査し、具体的な取組内容を明らかにするとともに、大学種別等の変数による比較検討を行う。

移民女性の家庭戦略と越境的実践——在日中国人キャリアウーマンの事例研究から

劉晶

結婚や出産を契機に、妻・母・娘といった複数の役割

を担う移民女性は、家庭内外におけるジェンダー・世代・国籍の差異に直面しつつ、キャリア形成や社会適応の過程で多層的な困難に直面している。本報告では、日本に移住した中国人女性キャリアウーマンを事例に、彼女たちが家庭という生活単位の中で展開する越境的な実践と、その調整戦略を明らかにすることを目的とする。具体的には、「同質婚」や「候鳥型育児支援」といった文化的・社会的実践に注目し、家族内外における「情・権・利」の力学の中で、彼女たちがいかに文化的資源を活用し、家族全体の利益と自己のキャリアの間で柔軟かつ戦略的に役割を調整しているのかを考察する。また、家庭が日本社会との接点として機能すること、そして移民女性のアイデンティティ形成において重要な基盤であることを示し、現代日本における移民家族のジェンダー構造とその再編の動態を明らかにする。

大学運動部の女性競技者と指導者の信頼関係

天羽 礼

「信頼関係」は、スポーツ全般における指導者と競技者の関係において重要な要素であるとされている。現在、日本のスポーツ指導者の割合は、男性指導者が圧倒的に多く、女性競技者が同性の指導者から指導を受ける機会が少ない。本研究は、大学の運動部で競技を続けている女性競技者と指導者の信頼関係、特に指導者の性別による差を明らかにすることを目的とする。また、今後女性がスポーツをしやすい環境を構築する上で、女性競技者が抱える阻害要因を確認することも目的である。研究方法としては、Zhang & Chelladuraiによる「競技者のコーチへの信頼前提条件と結果」(ACAT) 翻訳版を用いて、指導者に対する信頼等に関する評定を測定した。

【分科会 4 ワークショップ】

(14号館 4階 D402 教室)

社会人を経験した女性大学院生のワークショップ——大学院での私の「はて？」は個人的なものか、政治的なものか——

司会：甲斐一再

担当幹事：須長史生

報告者：鴨谷 香・清水由紀子・西川由紀

なぜ私たちは大学院に進んだのか。「女」の立場を経験して違和感や理不尽さを感じてきた。職場、家庭、子育て、DV、離婚など。女性ならではの社会経験があるからこそ立てる視座、見える視野がある。私たちはこういう当事者性の高い問題を問いとして、大学院の門をくぐっ

た。果たして大学院は、私たちの思いを叶える場所だったのか。進学後、私たちは「大学院」という問題に遭遇した。様々なハラスメント、院生の孤立、相談先のなさといった障壁があったのだ。この障壁とは何か、具体的に可視化するためにアンケート調査を実施したいと思っている。当日、私たちの大学院経験を共有します。また、アンケート調査票（案）を持参します。より充実した調査につなげるために、皆様のご経験を踏まえた提言をお待ちしています。社会人を経験した女性の大学院進学について、様々な立場から意見を交換できるワークショップにしたいと思います。ご参加、お待ちしております。

6月8日（日） 13:00～15:30

【分科会5 個人研究発表】

(14号館5階 D502教室)

司会：千田有紀

地域における男女共同参画センターの役割—運営責任者の役割認識に着目して—

近藤佳美

男女共同参画センター（以下、男女センター）は、地域における男女共同参画のための総合的な拠点である。男女センターに対しては、女性リーダーの育成や男女共同参画・女性活躍のための意識改革・人材ネットワークの拠点として様々な期待があるものの、その役割や実態は社会の中で十分に理解されていない。また統廃合や予算縮小といった危機に直面している例も少なくない。報告者は2024年に都市部の男女センターの運営責任者5名に男女センターの役割についてインタビューを行った。運営責任者としての共通の役割認識として「基盤の役割」「女性に対するさりげない支援」「意識変容の学習を通じて一緒に活動する仲間を増やす」「社会を変える運動を支える」が抽出された。本報告では語りで得られた運営責任者の役割認識に着目し、今後の男女センターの役割やその組織の独自性について検討する。

公的部門で相談支援を行う女性相談支援員（旧婦人相談員）の専門性と労働状況

小川真理子

2024年4月、「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律」（2022年成立。以下、「女性支援法」と記す）が施行された。同法のもとで重要な役割を担うとされている女性相談支援員（女性支援法施行により改称、旧婦人相談員）の専門性及び労働条件は長く見過ごされてきた。これは女性相談支援員が日本の特殊性のもと少数者

の問題として等閑視されてきたことに起因する。2022年から2023年に全国規模の「婦人相談員」約1600人を対象に行った定量調査（N=638、回答率42%、また、定性調査（N=50）を基に、婦人相談員の現状と課題を明らかにした。本調査結果からは、日々専門知識をアップデートし、やりがいを持ち被支援者に接する姿が看守された。他方、会計年度任用職員制度による雇用の不安定化、職場での孤立、過酷な労働状況に直面している実態があった。女性支援法の運用にあたり、婦人相談員の専門性の確保と待遇を改善することが急務である。

介護保険制度下のケアマネジャー業務に関する理論的枠組み—家族介護の「費用化」と福祉の privatization がもたらしたもの

中林基子

本報告は、介護保険制度下のケアマネジャー業務に関する理論的枠組みを提示することを目的とするものである。その際、ケアマネジャーが相談援助業務が実践される在宅介護領域は、制度創設において生み出された「家族介護を、労働としての『代替性』と『費用化』の観点から捉えることを可能にした言説空間」（森川2024:111）であることに着目し、ケアマネジャーの業務実践がどのように家族介護の位置づけを変えていくのかについて論じる。また「介護保険制度改定によって推し進められた福祉の privatization がケアマネジャー業務の性格をどのように変えたかについて論じる。

警察官駐在所制度における配偶者の役割と問題

牧野雅子

警察官駐在所は、一人の男性警察官が専業主婦の配偶者とともに居住して地域に密着した活動を行うことが基本の警察の総合出先機関である。駐在所は日本の近代警察制度の黎明期から存在し、2024年4月現在、全国で5,923か所が設置されている。駐在所員の配偶者は「駐在所夫人」と呼ばれ、夫の不在時に来所者の対応にあたる他、地域に溶け込んで駐在所と地域の橋渡しになったり、夫と共に交通安全教育や広報紙の作成を行ったりするなどの、駐在所の補助的な業務を担っている。「駐在所夫人」は警察職員ではないが、全国の警察でその協力に対して報奨金が支払われることが制度化されており、実質的な警察組織の構成員とよいい存在である。本報告では、「駐在所夫人」の役割や、法的には規定がないにもかかわらず実質的な構成員として制度化された経緯を整理し、配偶者を取り込む治安維持業務の問題について考察する。

【分科会 6 個人研究発表】

(14号館 6階 D601 教室)

司会：井谷聡子

「日常の実践が生む連帯——非異性愛女性の語りからみる現代日本の性的マイノリティ運動の変容」

呉 丹

本研究は、現代日本における性的マイノリティ運動の変容について、異なる世代に属する3名の非異性愛女性の語りを通じて考察することを目的とする。先行研究では、1990年代中旬以降、アイデンティティ・ポリティクスの解体が進み、当事者の関心が社会的抑圧から個人生活の快適さへと移行していることが指摘されている。そこで、個人の性的アイデンティティに基づく権利要求から、個別の生きづらさに基づく緩やかな連帯へと変化し、その過程で社会への関心が後景化する可能性が示唆されている。本研究では、ミクロポリティクスの実践を記述することで、こうした変化が必ずしも社会的関与の希薄化を意味するのではなく、むしろ職場において当事者を含む新たな連帯の形成を促し、日常生活を基盤とした異性愛中心主義への異議申し立てを可能にする側面を明らかにする。

チャンドラ・モハンティの「第三世界」フェミニズムを再読する：トランスナショナルな連帯の構想

近藤凜太郎

インド出身のアメリカ合州国在住フェミニスト、チャンドラ・タルパデー・モハンティは、1986年刊行の論文「西洋のまなざしの下で」において、西洋白人フェミニズムによる植民地主義的な国際開発論を批判したことで知られる。だが、モハンティの議論の射程はこの論文だけにとどまるものではない。86年論文の刊行後、90年代にかけてモハンティは、「第三世界」移民ウイメン・オブ・カラーとしての固有の立ち位置から出発しつつ、トランスナショナルな連帯 (solidarity) のヴィジョンを打ち出していく。本報告では、モハンティの「第三世界」フェミニズムが、単一の中心や固定的な外延をもたず、かつ属性や経験の同質性を基盤としない、つねに生成途上にある集成的過程として、連帯を構想したことを明らかにする。その構想は、反人種主義・反植民地主義・反資本主義的实践を重視する今日的なフェミニスト・ムーブメントの理論的源流のひとつと位置づけることができる。

大正・昭和初期における田島ひでの日本左翼女性運動での読み直し 雑誌『未来』を中心に

バギロヴァ・ララ

本報告では、大正・昭和初期における日本の左翼女性運動を、田島ひでとその雑誌『未来』に焦点を当てて分析する。田島ひでは、市川房枝や平塚らいてうが指導する新婦人協会の活動に参加し、さらに、赤蘭会や八日会といった社会主義的女性団体に関与し、日本における最初の国際婦人デーの記念行事にも貢献した人物である。1926年3月の国際婦人デー記念に際し、田島ひでは婦人労働調査所を設立し、雑誌『未来』を創刊した。同誌は全国の労働組合や農民組合を通じて読者を拡大し、女性労働者間で予想を超える反響を呼んだとされている。一方、女性労働者に大きな貢献を果たしたとされている雑誌『未来』に関する先行研究は少ない。本報告では、田島ひでとその雑誌『未来』が日本の左翼女性運動において果たした役割を再考し、特に一般無産婦人に対する貢献を分析することを最終的な目的とする。

女性の侠気と非暴力—天理教教祖の事例—

熊田一雄

ジェンダー研究において「男性のケア」の重要性が言われて久しいが、「女性の侠気」もまた重要な問題ではないか。「鬼滅の刃」ブームに見るように、現代日本では、両者は接近しつつあるようにも思える。「侠気」は、「民衆的正義感のふるさと」(佐藤忠男)と考えられるが、「暴力」と親和性が高いという問題を抱えている。老境に達して教えを説き始めた天理教の女性教祖・中山みき(1798—1887)は、しばしば自分の元を訪れた力自慢の男性に力比べを持ちかけ、簡単に負かしては、「神の方には倍の力」と説いてきかせていた。この発表では、みきの力比べパフォーマンスの狙いの一つが、弱者救済(「谷底せり上げ」)を目指した「侠気」に満ちた自分の運動が、民衆暴動へと転化していく可能性をなくすことにあった、と論じる。

ナミビア福音ルーテル教会で語られるジェンダー観：平等か差異かを超えて

渡邊麻友

ナミビア福音ルーテル教会(以下、ELCIN)には、現在64人の女性牧師が所属しており、これはELCINに属する全牧師の40%にあたる。また、2024年には上位職である監督(Bishop)の地位に、同国史上はじめて女性が選出された。このような背景のもと、ELCINの牧師を対象に教会指導者のジェンダーにかんするインタ

ビュー調査を行った。その結果、教会指導者の資質について「性別に関係なく平等であるべき」とする立場と「女性牧師のもつ共感性や母性といった特性を評価すべき」とする立場の、二つの考え方が浮かび上がった。本発表では、これら二つのジェンダー観がどのような文脈に基づいて語られ、互いにどう関係しているか明らかにすることを目的とする。こうした分析を通して、現代の教会におけるジェンダーとリーダーシップのあり方に対する理解を深めることを目指す。

【分科会 7 個人研究発表】

(14号館 6階 D602 教室)

司会：宮津多美子

「女子徴兵」と軍事主義——韓国若年女性フェミニストが女子徴兵制に賛成する理由から

金 孝貞

朝鮮戦争を契機に導入された韓国の男子皆兵の徴兵制は、近現代史において、「国民」を線引きする手段として機能し、徐々にその対象を拡大してきた。今日まで女性は、徴兵対象に含まれていないものの、近年では、女性も徴兵すべきであるという「女子徴兵制」論が活発に議論されている。本報告では、こうした「女子徴兵制」論に対する、韓国の若年女性フェミニストたちの反応に着目する。まず、韓国社会における「徴兵制」の役割を概観し、女子徴兵制論の誕生背景を確認する。そのうえで、若年女性フェミニストたちが「女子徴兵制」論を支持する理由として挙げているジェンダー平等と軍事主義の論理を分析する。最終的には、現代韓国における軍事主義がいかに再構築されているのかを論じる。

ケアをめぐる知の再構築——ブラック・フェミニズムの思想と実践から

細島汐華

西洋男性中心的な公私二元論の解体を目指すケアの倫理は、黒人フェミニスト研究者であるパトリシア・ヒル・コリンズなどによってその白人中心性が批判されている。白人中産階級女性の経験を基盤として構築されてきたケアを脱中心化するためには、インターセクショナルリティの視点と、周縁化された人びとの生きられた経験を知の出発点とするスタンドポイント認識論が重要となる。本報告では、抑圧と暴力に抗する政治実践としての

ケアを再訪するため、スタンドポイント認識論を振り返りながら、ブラック・フェミニズムや廃止主義（アボリショニズム）の思想と実践を参照し、ケアの倫理の再構築の可能性を検討することで、現代社会の不平等と闘う力となり得るケア政治の展望を模索したい。

ジュディス・バトラーにおける他者化された身体や欲望と抽象性

五十嵐舞

ジュディス・バトラーの議論において他者化された身体と欲望、あるいは身体や欲望をめぐる規範とそしてその規範からはみ出し他者化された存在に関する問題がその初期のパフォーマティヴィティの議論から、近年のプレカリティやアセンブリをめぐる議論まで、焦点化の在り方は異なっても常にその中心的な位置を占めるという理解にあまり異論はないだろう。バトラーの議論において、その他者化された身体や欲望などは、完全に排除できるものではなく常に規範的とされるものに付き纏い、おびやかし、あるいは内在しているとされる語りは、時に抽象的だという批判を受けてきた。本報告では、他者化された身体や欲望に関するバトラーの議論を再訪しつつ、その抽象性の再評価を試みる。

セネガルにおけるフェミニズム運動の現在：女性支援団体における参与観察を通して

金信光恵

西アフリカのセネガルでは、1970 - 80年代にアワ・チャムが植民地支配と家父長制によってアフリカ女性達が抑圧されている現状を告発し、「イエウ・イエウィ：女性の解放のために（Yewwu Yewwi Pour la Libération des Femmes）」を筆頭にフェミニズム運動が盛んになった。こうした運動は一定の効果をもたらし、2025年4月時点でセネガルの国会における女性議員の割合は41.2%である（西アフリカで1位、アフリカ全土で6位）。一方、女性やLGBTQ+の権利を推進する運動に対するバックラッシュもアフリカ全土で広く見られ、セネガルでは宗教保守団体によるジェンダー平等政策へのバッシングや、同性愛の厳罰化を求める運動として表出している。本研究ではそのような状況下でのセネガルにおけるフェミニズム運動の現在を、ある女性支援団体の参与観察を通して紐解く。

【分科会 8 パネル報告】

(14号館4階 D402教室)

ジェンダー視点で考える公共サービス

司会：渋谷典子

「ジェンダー化された公共サービス」を可視化し課題を解決するために

渋谷典子

公共サービスを担う公務労働の場では、地方自治体だけを見ても非正規公務員の4人に3人は女性ということが常態化し、公務の民間化のなかで働く人を含めれば、非正規での公務労働従事者の数はさらに膨れ上がる。こうした現状を「ジェンダー化された公共サービス」として位置づけ、課題解決に向けて検討する。まず、公務非正規の実態や課題を働き手の立場から明らかにし、課題解決を図ることを目的にした緩やかなネットワーク「公務非正規女性全国ネットワーク」（以下、「はむねっと」）の活動に着目する。「はむねっと」は、2021年から非正規公務労働従事者の調査を実施し「ジェンダー化された公共サービス」を可視化するための実践を継続している。あわせて、「はむねっと」の協力を得て2022年度から取り組む「公務非正規女性が支える専門職の持続可能性についての実証的研究」を捉え、実践と研究がどのようにつながり、社会の課題を解決していくのかについて検討する。

図書館職場における非正規女性の困難性

廣森直子

図書館職場は非正規女性が多く働いており「ジェンダー化された公共サービス」の職場として特徴づけられる。図書館や司書は図書館法（1950）に規定され、日本図書館協会は「図書館の自由に関する宣言」（1954採択、1979改訂）で示された図書館の社会的責任を自覚し、自らの職責を遂行していくための図書館員としての自律的規範として「図書館員の倫理綱領」（1980）を掲げている。しかし、こうした法制度や専門職団体の「努力」も現状の非正規化した図書館職場の司書職の待遇改善のために機能しているとはいえない。一方で、はむねっと2024年調査では他職種に比べて図書館員は勤務年数が長く、図書館職場に長く留まる傾向があるとも考えられる。科研で行った公務非正規専門職5職種25人へのインタビュー調査から図書館司書5人について、専門職として働くための雇用条件と職場環境という観点に着目して、非正規化した専門職の職場で働く困難性について検討する。

担い手の専門性及び働き方から考える男女共同参画センターの課題

瀬山紀子

女性関連施設（＝男女共同参画センター）には、図書館における図書館法、公民館における社会教育法のような明確な設置根拠となる法律がなく、その役割や設置基準についての統一的な規定は存在してこなかった。そうした中で、2022年から、国は、「独立行政法人国立女性教育会館（NWECC）及び男女共同参画センターの機能強化に関するワーキング・グループ」を置き、2025年3月、NWECCを全国の男女共同参画センターの支援を行う「センターオブセンターズ」と位置づける新たな法律をつくることを閣議決定した。本報告では、こうした直近の動きを踏まえながら、この間行ってきた公務非正規専門職の聞き取り調査、および、はむねっと調査をもとに、特に、働き手によって認識されている男女共同参画センターの「専門性」及び、働き方の現状を明らかにするとともに、センターの機能強化における課題を明らかにしたい。

女性は有配偶なら低年収でよいのか

池橋みどり

公務非正規女性全国ネットワーク（はむねっと）は、4回のアンケート調査において公務職場で非正規で働く主に女性たちの実態を明らかにしてきた。最新の調査（2024）でも前年（2023年）の就労年収は、週当たり35時間以上働いている者全体（ $n = 185$ ）のうち、15.1%が150万円以上200万円未満、29.2%が200万円以上250万円未満、21.1%が250万円以上300万円未満で、合わせて65.4%が150～300万円未満だった。全体（ $n = 676$ ）の約4割は自らが「主たる生計維持者」だが、過去3回の調査には配偶関係についての情報はなかった。そこで、最新の調査により得られたデータから、配偶関係をクロス集計により確認した。就労年収との関係を見てみると、どの年収区分でも有配偶の者が多いが、200万円以上300万円未満で約4割が、また、200万円未満でも約2～3割強が有配偶ではない。では、女性は有配偶なら低年収でよいのか。本報告では、これを考えてみたい。

会員の著書紹介

- *山根純佳・丸山里美編『ジェンダー・セクシュアリティ』岩波書店、2025年
- *岡野八代『ケアの倫理と平和の構想 戦争に抗する』岩波書店、2025年
- *佐藤智美『女性教員・女性校長が語るジェンダー平等』晃洋書房、2025年

——会員の著書紹介募集——

以下のルールで会員のみなさまの著書を紹介します。掲載ご希望の方は、事務局担当者までご連絡ください。

- ・会員が執筆・編集している単行本（分担執筆含む、雑誌をのぞく）
- ・1年以内の発行物
- ・ご本人の申し出があったもの
- ・寄贈は条件としない
- ・寄贈いただいたもので会員の著書と判明したもの

会費納入のお願い

郵便局備え付けの払込用紙をご利用のうえ、下記の納入先までお振込みください。

ゆうちょ銀行 振替口座
口座記号番号 00890 - 6 - 31306
加入者名 日本女性学会

- ネットバンキングでも納入できます。

ゆうちょ銀行 支店名：089（ゼロハチキユウ） 預金種目：当座 口座番号：0031306

- 日本女性学会の会費は年収スライド制（自己申告・税込み・該当年度予定収入）をとっております。

- ・400万円未満（無職・学生含む）：6,000円
- ・400～600万円未満：8,000円
- ・600万円以上：10,000円

- 3年以上会費を滞納されている方は退会とみなされます（日本女性学会幹事改選選挙実施規定第4条（3））。複数年滞納されている方は、過不足なくお支払いいただくためにもご自身の納入状況を事務局にご確認のうえ、どうか早急にお支払いください。

- 学会の運営は会員のみなさんの会費によって成り立っています。重ねてのご協力をお願いいたします。

- 永年会員制度をご活用ください

2021年度から永年会員制度が開始されました。前年度までの会費を納めている65歳以上の会員は、前年度会費額の3ヵ年分の納入によって会費完納とし、永年会員となることができます。振り込み時に「永年会費」とお書きください。

65歳以上の会員の皆さま、どうぞご活用ください。

大会会場アクセス

立教大学池袋キャンパス（東京都豊島区西池袋3-34-1）

学校法人 立教学院（池袋） アクセスマップ

JR 各線
「池袋駅」西口より大学正門まで徒歩約7分

地下鉄東京メトロ
丸ノ内線/有楽町線/副都心線「池袋駅」西口より大学正門まで徒歩約7分
有楽町線/副都心線「要町駅」6番出口より大学正門まで徒歩約6分

西武鉄道
西武池袋線「池袋駅」西口より大学正門まで徒歩約7分
西武池袋線「椎名町駅」北口よりマキム門まで徒歩約12分

立教学院（池袋） 構内案内図

rec.rikkyo.ac.jp

多目的トイレ (オストメイト対応)

多目的トイレ

エレベーター

リフト (車いすリフト)

▲ 車いす対応建物入口

→ スロープ等